

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2023. 10. 3

文責/JUN

授業研究会、どうあるべきか？

1 「よい授業を」という意識からの脱却

コロナ禍の制限から抜け出して、各地の学校に「公開授業研究会」が戻ってきた。やはり、学ぶ子ども、授業をする教師、そこで生まれる学びを目の前にすることに勝るものはない。

自分の学校、自分の教室に閉じこもっている、周りでのどのような素晴らしい取り組みが行われているか知るよしもない。こうして、それらの教師は、小さな偏った自分の殻の中だけで生きることになる。そのデメリットはその教師本人だけのことで済まない。自分の殻に閉じこもった教師の授業に身を置かなければいけない子どもたちがその影響を受けるからである。そう考えると、公開授業研究会が行なわれること、その研究会に参加することの意味は大きい。

ただ、その際、授業をする教師がどういう意識を抱いて授業するか、参観する教師が何を見ようとして参観するかが重要である。結論から言う。「よい授業をしよう」「よい授業を見たい」という意識を強く抱いてしまうと、授業づくりの本質から遠ざかってしまう危険性がある。

このように述べると、かなりの先生方が、どうして「よい授業を」と思うことがよくないのかと反論されるのではないだろうか。「よさ」を求めなければ取り組む意欲は生まれず、どの教師だって「よい授業」を目指している、そのどこがおかしいのかということになるからである。また、他校を訪問して授業を見るのは「よい授業」を見たいからであって、そうでなかったらわざわざ自分の学校を空けてまで参加する意味はないという人もいるかもしれない。しかし、実は、その意識が、授業の本質をとらえる私たち教師の“まなざし”を曇らせてしまう危険性があるのだ。それは、次のようなことが起きてしまうからである。

子どもの学びを目指す授業がどれほど難しいか、教師ならだれもが感じていることである。授業の学習材は、研究すればするほど、気づいていなかったことや新しいことが浮かび上がる深いものだし、子どもは何人もいてその一人ひとりが「その子らしさ」も「異なり」も持っているし、それらの子どもたちのかかわり・つながりは日々次々と生まれては変化している。そのような子どもの状況に合わせて、一人ひとりに学びを生み出すのが授業である。私は、授業をつくることほど複雑で難しいものはないと思っている。「よい授業」などそんなに簡単に生まれるものではないのである。もちろん、難しいからこそ授業づくりには魅力があるのだけれど。

ここまで述べて気づいていただけた方もいるだろう。研究授業で「よい授業をしたい」と思えば思うほど、学ぶのは子どもであるのに、子どもの内側目線に立てず、「よい授業」という教師目線の結果を追いかける心境に陥ってしまう。そうすると、子どもの思いも、子どもの中に生まれている事実も

見えなくなる。そして、教師の都合のよい方向に引っ張り、そうなりにくいところは、覆い隠し繕う、そういうことになってしまう。それは、表面だけの見栄えを重んじる「よい授業」ではない。それは、決して子どもにとって「よい授業」ではない。

では、「よい授業」を目指さない研究授業とはどういうものなのだろうか。もちろん、順番が回ってきたから行うというノルマになっては何の意味もない。私は、少しずつよい授業を目指したいという気持ちがあって当然だと思っている。ただし、その「よい」とは、子どもにとって「よい」という意味でなければならない。そのために、今回の授業で、何に「挑戦する」のか、どういうことに取り組むのかという「自分が自分の課す課題」をはっきりさせて行うとよいと思っている。そして、少しでも前進の感じられる状況が生まれたら、それで満足せず、「次に取り組むべき課題」を探る、そのために研究授業をする、そう考えればよいのだと思っている。つまり、授業実践者としての現在地を知る、そして、次の課題を見つける、研究授業はそのための行為だと考えたい。その結果、見直すべきことがたくさん見つかったとしても、それは、自分にとって必要なことでありよいことなのだ。それが見つからなかったら、知らないままになっていたのだから。

ただ、教師としてはそう考えるべきだけれど、授業で学ぶ子どもにとっては、「気持ちのよい時間」にならなければいけない。そうなるかどうかは、授業の良し悪しもあるけれど、教師の一生懸命さ、謙虚さ、子どもたちを大切に作る温かさ、つまりそれは、実践に対する真摯な態度、子ども一人ひとりを尊重する人間性が存在しているということである。それが最も大切なことではないだろうか。

ここまで述べれば、このように行われる授業を参観する心構えが「よい授業を見たい」ではないほうがよいという主旨はご理解いただけたのではないだろうか。

「よい授業」とは「結果」である。しかし、授業をする側にとってその日の授業は、「授業をつくる旅の過程の一里塚」である。だから、参観者は、「結果」だけを見るのではなく、その授業者の「過程」に寄り添う参観態度であるべきである。

参観者自身も日々授業をしている、つまり授業づくりの旅人である。同じ授業実践の旅人として授業を見つめることは、自分自身の授業づくりと結びつき、お互いの共感が生まれ、うまくいかなくて苦勞をしている授業であったとしても、その苦勞に向き合う授業者の懸命さが他人事ではなくなってくる。

つまり、授業参観とは、授業づくりの旅人同士の連帯に基づき、授業づくりの過程で生まれるさまざまな出来事を互いの実践と結びつけ、その時の出来事をもとに、参観者自身も、自分自身の授業づくりのあり方についての気づきを生み出す、そうすることではないだろうか。

そう考えれば、参観した授業がどういう授業であったとしても、そこからいくらかでも学ぶことができる。参観した後、もし「こんな授業だとは思わなかった。来なければよかった」と言う人がいたら、私に言わせれば、その人は「実践するとはどういうことか」が分かっていない人だと思うしかなく、気の毒になる。そのように「よい授業」しか眼中にない人は、自身の授業において、分からないで困っている子どものことが目に入らず、よい考えばかり求めてしまう、そういうことをしている可能性があるのではないだろうか。

授業づくりは、終わりのない旅である。授業研究会は、互いの旅、つまり授業づくりから学び合う場である。大切なのは授業をする側も参観する側も「謙虚さ」を忘れないことである。

2 教師の指導法中心の「研究協議会」からの脱却

「学び合う学び」の実践校では、授業後の研究会を、教師の指導法についてではなく、子どもの事実をもとに聴き合い考え合うようにしている。それは、どうしてだろうか。

それには、三つのわけがある。

(1) 子どもの事実に基づいて授業を見つめるため

学ぶのは子どもである。だから、子どもがどう学んでいたかを、繊細に、少しでも深く、すべての子どもに目を配ってとらえなければならない。「どこで学びが生まれたか、どこで学びが滞ったかを見つめ聴き合う協議会にする」と言っているのはそのためである。

そのため、協議会では、子どもの個人名をあげ、その子どもの言ったこと、書いたこと、考えていたこと、そしてそのときの表情や姿などを出し合うことになる。そうすることによって、この時間の子どもたちは、このように学んでいたのだと、研究会に参加した全員でふり返ることができる。

そうした子どもの事実を見つめないで、教師の指導法だけを検討すれば、その協議は子どもの学びに基づかないのだから、外見的・表面的な「やり方」だけのものになる危険性がある。

ただ、ここで心しなければいけないのは、授業を参観すれば子どもが何を語りどう活動していたかを見つめ、協議会ではそうしてとらえたことを出し合うことはできるが、それだけで終わってしまったのではよくないということである。

子どもの様子を出し合えば、授業における子どもたちは確かにそうしていたなあ、そういう様子だったなあとだれもが思い返すことができるだろう。ただ、それだけではその子どもの事実が有している大事さは浮き彫りにはなっていない。

「ちいちゃんのかげおくり」（3年生）の授業で、ドラマチックな場面に遭遇した。

その学級にKさんという男の子と、Sさんという女の子がいた。Kさんは、じっとしてられない子どもで、教室の中を歩き回ったり、廊下に出ていったりする子どもだった。一方、Sさんは、なかなか自分を出すことができず、指名されて発言するときでも小さな声でしか話せない子どもだった。

授業の前半、音読と書きこみを終えてペアで聴き合ったとき、Kさんが「ちいちゃんは、いつ亡くなったのだろう」と言いだした。一度何かに気づくとそのことで夢中になるところのあるKさんは、ペアの後の全体学習の冒頭、そのことをみんなの前に出してきたのだった。

もちろん、作品には「夏のはじめのある朝、こうして、小さな女の子の命が、空にきえました。」と書かれているだけで、どの瞬間にちいちゃんは亡くなったのかは書かれてはいない。だから、Kさんの問いかけに対して、何人もの子どもから様々な異なる考えが出されることになった。

そのときだった。いつもおとなしいSさんが手を挙げて自分の考えを言ったのだ。研究授業の場なのだから、それは驚くような出来事だった。ところが、何せ彼女の声は小さい。だから、何と言っているのか他の子どもたちには聞こえないのだ。

さあ、どうしたらよいのか……という雰囲気になりかけたときだった。突然、Kさんが、「ぼくが聴

いてあげる」と言って、Sさんのところまで近づいていったのだ。KさんはSさんの机に両手をつけて、彼女に顔を近づけて耳を澄ます。Sさんは言葉を選ぶようにして語る。じっと聴くKさん。やがてSさんに何か確認したいことがあったのだろう、彼が一言二言何か問いかけた。それにSさんが答える。こんな様子を、他の子どもたちが一言も発しないで眺めている。

この光景は、これまでにはなかったことだったに違いない。つまり稀有な出来事なのだ。教室にいられなくなりがちなKさんと小さな声でしか話せないSさんという、どちらかと言うとみんなの学びの端にいるような二人が、今、大勢の参観者に囲まれた研究授業の中心にいるのだから。

他の子どもたちが注目する中、少しして、KさんがSさんから聴き取ったことを先生に伝えようとした。けれど、先生は、「みんなに伝えて」と言って、Kさんに学級中のみんなに話すように促したのだった。彼が口を開く。

「大体で言うと、……思い出がぼあつと空に広がった感じ。」

その瞬間、授業をみていた私は、一瞬にして心奪われた。この瞬間に出会えただけで、今日、この学校の研究会に来てよかったと思った。Kさんが代弁したSさんの考えは、「この時、ちいちゃんの頭の中に、お父ちゃんとお母ちゃんとお兄ちゃんと4人でしたかげおくりの思い出が浮かび上がってきた」というものだと思ったからである。

授業終了後開かれたこの学校の先生方による協議会で、私はその場にはいなかったが、先生方からこのシーンのことが出されたそうである。こういうことが語られる協議会、学校中の先生方で「よかった」と言い合える協議会、それがどれほど素晴らしいことかと思う。

その協議会に出席していたその学校のT先生と研究会終了後に話をする機会があった。そのとき、M先生がKさんの行動に驚き感動していたということ話を話してくださった。そんなことを話しているところにM先生が来られると、T先生は「この日までM先生が、ずっと大切に温かくかかわってきたからだね」というようなことをM先生に向かっておっしゃったのだ。なんと温かい言葉だろう、協議会でもきっとそういう雰囲気だったのだろう、そう思って、私までうれしくなったのだった。

それにしても、Sさんの言った「思い出がぼあつと空に広がった感じ」は、「いつちいちゃんが亡くなった」よりもずっとずっと物語の味わいをもたらしてくれる。

文章には「お父さんの声が、青い空からふってきました。」と書かれている。Sさんは、その声が聞こえてきたのは、お父さんの出兵前に、家族4人でかげおくりをした、あのときの思い出がぼあつと心の中に、そして、空に広がったからだと言ったのである。それは、Sさんがちいちゃんに同化するように読んでいたからこそ生まれた考えだったと言える。

それにしても、そのSさんの考えをみんなに伝える仲介をしたのが、「いつちいちゃんは亡くなったのか」にこだわっていたKさんだということがドラマだと思える。

彼は、この直後、「ぼくの疑問、解決した」と言って、ちいちゃんが亡くなったのは、黒板に貼ってある本文の「お父さんの声が空からふってきました。」辺りを指し示したのだった。彼は、Sさんの「思い出が広がった」に心動かしたのだ。だから、ちいちゃんが亡くなったときに、ちいちゃんの中にそういう情景が浮かんでいる、それがどんなに心打つものであるか気づいたのだ。

授業の中の子どもの事実をとらえるということは、私はこういうことだと思っている。だから、も

し私が協議会の場の一参観者としていたら、「Sさんの言った『思い出で心の中をいっぱいにして
るちいちゃん』を思い浮かべるため、この場面をだれかに音読させ、その音読を子どもたちみんな
で聴くようにしたいと思う。そうなったらどんなによかったらろう」と発言したらろうと思う。

子どもの事実を出し合う協議会とはそうなることを目指すものでありたい。この学校の授業および
協議会にはそうなる芽吹きが生まれている。その日の学びの事実、子どもの事実から、子どもの学び
を深める手立てを浮き彫りにしようとしているからである。

かつての授業研究では、子どもの事実をださないで、発問がどうだとか、授業規律がどうだとか言
って、教師の指導法を論じ合う傾向があったのではないだろうか。子どもの事実に基づかない教師の
指導法は、時に、あら捜しになり、互いのやり方の応酬になり、ひどいときは、授業の事実そっちの
けの教材解釈の論じ合いになったりする。そういう持論の応酬は、違いを大切に聴き合って、それぞ
れの授業づくりにつなげていく協議会にはならない。授業の研究会で行う協議を討議と呼ぶ学校があ
るが、ここで私が提起しているのは決して討議ではない。「討伐」の「討」は、授業づくりには似合わ
ない。「討議」などという言葉は不用意に使わないほうがよい。

子どもの事実を大切に、その事実に基づいて授業のあり方を真摯に、丁寧に探っていく、協議会が
そうなることで、そこに参加したすべての教師の授業改善が可能になる。その第一歩が、「子どもの事
実を出し合う協議会にする」ことなのである。

(2) 授業をした教師の「これから」のため

授業ほど複雑極まりないものはない。だから、どれだけ経験を積んだ教師であっても完璧な授業は
できないと言ってよいだろう。だれの、どんな授業でも、どこかに問題点はないかと探せば、いくつ
でもは見つかるものである。そういう問題点を見つけようと参観し、そういう目で見つけ出した「で
きていないこと」を指摘し合う協議会にしたらも授業をした教師はどう感じるだろう。そのような協
議会によって、「これからの授業づくり」への意欲は生まれるだろうか。

非常に厳しく指摘し合う授業研究をしている学校から「学び合う学び」の学校に転勤してきた人が、
転勤後はじめての研究授業に対する協議会の後、こんなことをおっしゃった。

「私は、3月までの学校で、研究授業をするが怖くて怖くて……。だから、今日も、どれだけ
の問い詰めを受けるのだろうとトラウマになっていました。でも、今日の協議会
はそんなものではありませんでした。最初はほっとした感じになっていたのですが、協議会が
続くうち、そうか、そうすればよかったんだとか、明日からの授業でやってみ
たいことがたくさん出てきました。皆さん、ありがとう。こんな協議会ならまた
やりたいと思いました」

私は、授業研究会の協議は、具体的な事実
に即したものであるとともに、人間味のあるものでなければなら
ないと思っている。「一人の教師も独りにしない授業研究」でなければ
ならないと思っている。うまくいっていない状況が授業に表れていたら、
その先生に寄り添う気持ちになってどうしていったらよいかとも
に考える、そういう協議会でなければならぬと思っている。「指摘する」
「詰問する」のではなく「授業をしたその人になってともに考える」、
そういう協議会にしなければならないと思
っている。

人間味が感じられない授業、授業者に対する敬意の薄い授業研究が横行する学校においては、必ずと言っていいほど同僚性にヒビが入る。もちろん、遠慮と自己防御のために、事実に触れることを避け、当たり障りのないことを言うだけの授業研究会をしている学校は、表面的には波風は立たないものの、上辺だけの人間関係に終始することになるだろう。

具体的事実にしっかりと基づいて、真剣だけれど人間味あふれる温かい協議会、そういう協議会のできる学校にしたいものである。

(3) 参観者にも学びが生まれるようにするため

協議会で学ぶのは、授業をした教師だけではない、参観したすべての教師に学びが生まれる、それが協議会である。

私は、学校訪問をすれば、全教員が参観するその日の中心授業だけでなく、すべての教室の授業を参観させてもらっている。ということは、たとえ短い時間であったとしても、どの先生にも私に授業を公開する授業者になってもらっていることになる。そのことの意味はとてつもなく大きい。自分も授業を公開しているので、中心授業をした同僚教師の気持ちが分かるからだ。だから、前述した人間味のある協議会にすることができるのである。

授業参観した時に、教師の指導ばかりに心を向けるのではなく、子どもの事実をとらえるようにする、そして、そのとらえたことを協議会で語るべきだということはずでに述べた。実は、それは、中心授業の授業者のためだけではない。参観者自身の自分磨きになるのである。

自分の授業ではない同僚の授業を参観し、授業後の協議会で子どもの様子がどうだったかと語れるようにするため、目を皿のようにして見つめ、耳をそばだてる、そのようにすることが、子どもや子どもの学びをとらえる感覚を養うことになるのである。参観する授業で子どもや学びがみえない教師が、自分の授業で子どもの事実がみえるはずがない、そう考えて、五感を働かせてみつめることで、参観者も学ぶことができるのである。

この意識が全教員に広がった学校になると、中心授業を参観する教師たちの様子が変わってくる。昔のように、教室の後ろで見ているという状態ではなく、教室の横から見ようになるし、ペアやグループが始まれば、子どもたちの邪魔にならないようにしながらも、そっと子どもに近づいて耳を澄ますようになる。すると、「子どもってこんなに考えているんだ。それを知らないまま今まで授業していたのかと思うとぞっとする」という声が聴かれるようにまでなる。

子どもの事実を見つめないで行う教師の指導法では、子どもの学びを深めることも、子どもの分からなさや戸惑いに応じることも、子どもの素晴らしい気づきを生かすこともできない。そう考えれば、「どう教えるか」に偏った授業からの脱却は、極めて重要なことだと分かっただけだろう。

そのためにまず大切なことは、授業のあり方そのものの転換であるが、その転換を促進するために大きな力を発揮するのが、本稿で述べた学校における授業研究会である。

子どもが学ぶ授業を実現するために、子どもの事実に基づく授業研究会は必須である。教師一人ひとりの“まなざし”を養うためにも、子どもの事実に基づく授業研究会は必須である。

個々の教師の授業改善と授業協議会の転換は、車の両輪である。